
青葉のうた。

ららら★

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青葉のうた。

【Nコード】

N1504B

【作者名】

ららら★

【あらすじ】

葉子は高校一年生ブカツ大好きっ子！これから、どんな高校生活がまっているのか？！

第一話。さまざまなデアイ

あの頃の思い出は
た青葉の様だった

太陽の光に当たって

キラキラとし

私の名前は市山葉子。高校
イチネンセイで吹奏楽部！ブカツ大好きっ子です！クラリネットパ
ートです！今日は、初のブカツはりきっていくぞ！！とブカツにい
こうとした時

『おい。ヨーコ』

声をかけてきたのは幼稚園の前から幼な

じみの山口純！純はちょっぴりおとなしめだけどココロ優しい少年。
とても大事な存在。

『何？純？』

『今日帰り平気？』

『今日、ブカ

ツで遅くなるよ？なんで？』

『母さんがわたしたいモノ

があるからって家によってかないかな？って』

『そっかー行

けたら、行くよ』

『分かった！』

そう言ってブカツに行こうとしたら・・・
カツ、頑張れよ』と笑顔で言ってくれた。

『ヨーコ。ブ

『うん！』

練習室へ歩いていく途中。『ね！ヨーコ』

『ん？！なに？百恵』

『山口クンってB組の子だよ

ね？どうゆう関係？』

『幼なじみだよ！純とは小さい頃から、ず

うーと一緒になんだ』

『ふーん。私、最後のあの、

がんばれよって奴。ドキってしちゃった！』

『えー！そうか

な？』

『だって、普通だったらさーあんなコトいわないってえ

ゝ』

『そんな！こちらは、男女の甘い関係とは

違って、深いところで気持ち繋がってるのお！』

『へ

えーなんかいいね！そうゆうの！でもいつかは…ってコトもありえ
るんじゃない？？』

『ないよおーでも、純は一番の

存在だよ恋とかそーゆーのぢゃなくて』ちょうど部室の所に来た。

ガチャガチャ

『閉まってるうー』

『鍵とりに行こう？』

しゅしゅ練習室のたなの奥に鍵をとりに行く所で：階段の方から、
コッコッコとゆう音が聞こえたのぼってきたのは、顧問の栄先生
『こんにちは！』 『ういっす』 『一年か？』

『は、はい！』 『名前は？』

『一年C組の市山葉子です。』 『同じクラス』

の河野百恵です。』 『葉子と百恵ね』

『は、はい』 そして、そのまま練習室の隣の先生の部

屋へ ガッシャン。『うっわー！！』 『下の名前で

呼んでくれた』 すると、ブシツ方から

『おい！イチネンセイ！』

『あ！鍵ー！！』 今日のブカツは、基礎練とブカツの鉄則
を学んだ。

一、校則はブカツはもちろんブカツ以外でも守。

二、我が校の吹奏楽部の一員として見られるので身だしなみはそろ
える。

三、感謝を忘れない。

『あゝ終わったゝ帰ろう？葉子』 帰る支度をして私達は昇降口に向
かった "ドン"

と私に誰か当たった 『イッタ』 『ワリィ大』

丈夫？』 といい少年が私をかるがると起こしてくれた
ドキッ！

《かっこいい！》

『ごめん！俺急いでるから』 と言い少年はいつてしまった

『大丈夫！？葉子』 『うん！平気！』

《何年生だろ？あの人：》そして、ちょうど下駄箱の所だった『あ
！純！待っててくれてたんだあ』 『うん。まあね』

と純が言って百恵が私の耳元で 『純ク』

ンも葉子のコト大切なんだね！深い意味で』 『うん。』

そう。どんな時だって 純と私は一緒。でも、私は純との
男女の関係なんて考えていなかった

第二話。青春の1ページ??

朝・・・

”ピンポン”

『葉子ー純君が来たわよー』

『はーい!』

私の朝は、7時半・・・アイロンとかで髪をなおしている間に、純がむかえに来る。純の家は、私のとなりのとなりの家。ドアを開けると・・・

『おはよ。』

純だ。

〓登校中〓

『昨日の部活はねー・・・』

そして、二人で色々な話をする。部活の話。クラスの話。テレビの話。・・・

『・・・だったんだー』

『純は、部活に入らないの?』

『俺?。?うーん。』

『純が好きな事にしまよ！中学の時は、テニス部だったけど、そんなに好きってワケでもなさだったし！』

『好きなことか』

《そうだよ、純。純の好きな道を歩きなよ．．．》

その時だった、私の目の前に自転車飛び込んだ！！！私は、ボーとして、きがついて・・・

『うわあ〜!!!!!!』

”
キツ
キ
”

気が付いたら、純の手が私の肩に・・・

『たくくお前は、ちゃんと前しろよ』

純がぶつかる直前で、私をひっぱて、助けてくれたのだ。

『ごめんなんさい』

純が手を離した

『どんくーせんだから、ガキの頃から』

『ど、どうせ、体育は、3しかとれないもん!!』

「へ！！だっせ」

『ぶ~~~~~』

こんな会話は日常茶飯事。

《でも、純。私以外にも、もっと笑っていいんだよ?!》

すると・・・

”タッタッタ”

誰かが走ってきた・・・

”ドン”

純の肩を叩いた

『よ!!! 山口☆』

《あ!!!!!!》

それは、この前私に激突したイケメン少年!!

『大澤くあ』

《大澤?》

『山口、また宿題見せてね☆じゃ!!!さらば!!』

と言って大澤君?は走って行ってしまった

『・・・・・・・・』

『あ！！！あの子誰？』

『大澤翔太。同じクラスの奴。』

『へえ』

『いちを・・・・・・・・俺のダチ。』

『純の友達・・・・・・・・純友達できたんだ！！』

『うん。まあねー』

『じゃ！俺こっちだから』

『うん！またね！！』

私たちは、別々のクラスに別れた。

”キーンコーンカーンコーン”

一時間目・・・・・・・・数学

ありえない

二時間目・・・・・・・・国語

ね、眠い

三時間目・・・世界史

カタカナばっか

四時間目・・・バトミントン体育

ま、負けた

〓お昼〓

百恵とランチ☆たらこスパッゲティー最高!!!!

五時間目・・・日本史

zzzz・・・

”キーンコーンカーンコーン”

『終わった〜部活!部活!』

この時間が最高のひととき・・・

〓in練習室〓

”がちゃ”

鳴り響くティンパニーの音・・・

《うまいな〜あの先輩・・・》

『お！キタ、キタ』

と先輩が言う。

『こんにちわ！！』

『うっす☆』

『名前なんて言うの？』

『市山葉子です。』

『葉子ちゃんか！よろしく！あ！俺は、3年の加藤秀徳！秀徳先輩でいいよ』

『あ！はい』

”がちゃ”

誰かが入ってきた

『こんにちは、秀徳先輩。』

『こんにちは』

まじめそうな女の子が先輩にあいさつをした。

『あなたは？』

と女の子が聞いてきた。

「私は、クラ・・・」

あ！！！！！！！！！！！！！！！！！！

と先輩が叫んだ。

「え！！？」

『すっかり忘れてた!!』

先輩はつかさず、私の所に来て私に言った。

『実は……今日から君は……』

『パーカッションパート!!!!!!!!!!』
（※打楽器）

《ま、まじか・・・そりゃく中学のときからクラリネットとかけもちでやってたけど・・・パークス好きだけど・・・》

『そ、そんな〜（泣）』

『栄先生のご指名だから俺が責任もって教えるから』

『え！！栄先生！！』

『あのを（怒）』

とキレ気味に私に話しかけた。

『あ！！ごめん！私、市山葉子』

『私は、竹内まり子。あなたと同じパークションパートよ！！』

『よ、よろしく・・・あはは』

『しかし、おかしいな！あと、二人くるはずなんだけど・・・』

と先輩が不安げに言った。

『ま！いっか！とりあえず基礎練教えるから、練習台とメトロノームとスティック持って集合ね☆』

『はい！』

〓練習中〓

中学の頃から、少しだけパークスはやってたけど、全然ダメだ、フォームからして、中学のときの癖が消えてない。

『手の甲は、天井だよ・・・あ、親指はこう・・・』

秀徳先輩に教えてもらいながら、やっているけど、一回叩けば直され拉致があかない・・・

《あゝまた、だめだあゝ》

私の気持ちを察したのか・・・先輩が私にいった。

『どうして、ちゃんとしたフォームで叩くのかとゆうとね、しつかりしたフォームってゆうか、手の使い方じゃなきゃ、早いテンポで曲を叩けないし、曲にあった表現ができないからだよ。』

といって、先輩は、メトロノームのメモリを下まで下げた。

《早!!!!無理でしょ!!!!動かないよ!》

だが、先輩は涼しい顔で、軽快な速さのメトロノームにピッタリとした速さで、機械みたいにカタッカタッカタと叩いた。私は、目をうばられた。

《うまい!!!!》

先輩は、手を止めた……

『ね!!!!!!』

先輩のまんねんの笑み

『だから、君は根気よく練習しなければなりません。』

『っはい!!!!』

その時、向こうの方から、誰かがものスゴイいきよいで走ってきた

”ズダダダダ”

『せーんーぱー!!!!いいいいいい!!!!』

” キツキー ”

勢い良く停車。

『先輩、すいません（泣）』

『雪……』

『授業中に寝ちゃってきがついたらこんな時間で』

『わかったから、自己紹介して』

『え？』

女の子と目が合った。

『あ！こんにちは、私。小林雪ですう』

『よ、よろしくう私、市山葉子。』

『おい！雪。七海はどうした？』

『あ！それが、体調不良で今日は、帰りました。』

『帰った？わ、分かった。OK。俺ちよつと部長ところに行ってくるわ……雪は練習しなさい。葉子ちゃんもちよつとやって☆』

『はい！』

と言って、先輩は行ってしまい。雪ちゃんも練習に行ってしまった。

私は、しばらく一人で練習していた。

すると、綺麗なサックスの音色が聞こえてきた。

《誰だろゝ先輩かな・・・》

ふと、音が聞こえてくる方を見たら。

《あ！！！大澤 翔太！！うそ。同じ部活なんだゝ》

彼の音色は、すごく綺麗で、サックスの甘い音色が、私の神経を狂わすようだった。

《ずっと、聞いてたいなゝ》

すると、急に音が止まった。

は！！！っと目を開けると彼がこっちを見ていた。

《え？》

『君、打楽器〜?』

『うん。まあ〜ね!!』

すると、じ〜と。翔太君が見てきた。

『どこかであった事があるような・・・』

『あの時は、帰りでぶつかちゃって・・・』

『あ!! 俺が追突しちゃった子か〜あん時はごめんな〜』

『ううん! 平気。』

『名前なんてうゆの?』

『よ、葉子。市山 葉子。』

『葉子!! よろしく〜』

ずっきゅ〜ときた。まさか、また、会えるなんて。しかも、2回目。しかも、おんじ部活。こ、これは、やっぱり

《高校での青春スタートか!!》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1504b/>

青葉のうた。

2010年10月28日04時14分発行